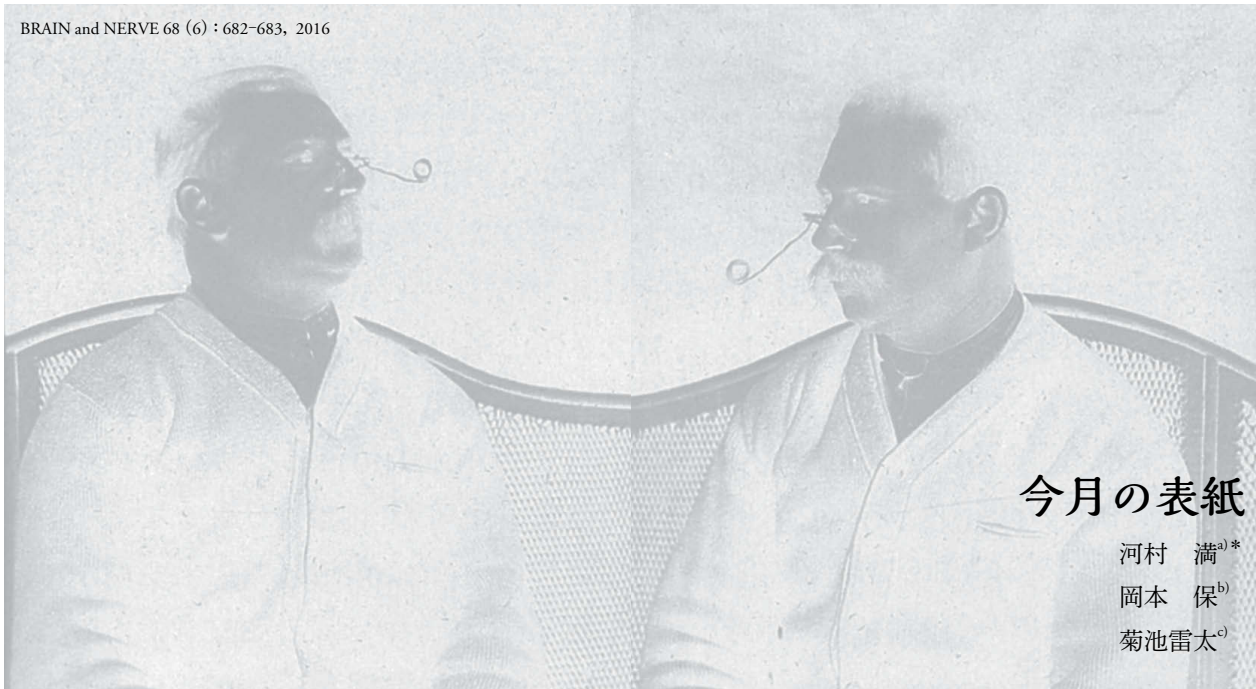




今月の表紙

河村 満^{a)}*岡本 保^{b)}菊池雷太^{c)}

攣縮性斜頸／痙性斜頸 (spasmodic torticollis) の矯正手技 (試験) は、いろいろな名称で呼ばれています。英語の「sensory trick」(感覚トリック)、フランス語の「geste conjuratoire」(まじない動作) や「geste antagoniste」(拮抗動作) がそれです。この手技の効果についてはワルテンベルグ (Robert Wartenberg; 1887-1956) も詳しく述べており、ジストニー性斜頸の特徴としています¹⁾。

この現象の最初のまとまった記載は、1894 年に行われたブリソー (Édouard Brissaud; 1852-1909) の講義録 [編集はメージュ (Henry Meige; 1866-1940)] にあります²⁾。この講義録には 7 症例が記載されており、Fig. に示すようにすべての症例における矯正手技の効果が写真で明示されています。当時、矯正手技の効果はブリソー徴候と呼ばれることもあったのです。

ブリソーは攣縮性斜頸の原因を器質

性のものではなく、精神性と考えており、本号の表紙に使用した写真の著者ら³⁾も同じ立場でした。しかし、この点についてはのちに多くの議論が起こります。これについては次号で紹介したいと思いますが、今回は器具を用いた矯正手技が目を引く、写真の症例について紹介します。

診察すると、頭部が奇妙な動きを呈するのがわかる (前・後屈、左右の回旋運動を伴った右への傾斜で、主に前屈と左回旋運動がみられる)。頭部は左右・上下に交互に向きを変え、正常位を越え、新たに傾く。意志の力で患者は収縮に抵抗できる。右の胸鎖乳突筋と僧帽筋の収縮が、左の収縮より圧倒的に強く、少しためらった後、頭部は、抵抗不能に、前屈で左向きに強制的に回旋した状態に持っていかれる。この状態で右肩

は挙上するが、これは攣縮の発現に僧帽筋が関与することを示唆する。患者は数秒間この状態を保ち、それから頭を挙上し、新たに激しくも、多様な速さで収縮を繰り返す。

(中略)

患者自身の指で回旋側すなわち反対側の顎や鼻などに力を入れず軽く触れるだけで完全に攣縮を止めることができる。他人の指でも同様の結果が得られる。最近では、患者は非常に巧妙な小機器を開発し、これを用いて同じように攣縮を止めることができている。

この機器はレンズを除いた鼻眼鏡の縁にすぎず、患者は、鉄線の端を 10 cm くらいの長さに調節した。この柄の部分が鼻眼鏡の面に垂直になるように固定し、ばねでレンズ受けを支えている。

攣縮を止めるにはただ機器を鼻に

a) 昭和大学病院附属東病院, b) 富坂診療所, c) 汐田総合病院神経内科

*[連絡先] kawa@med.showa-u.ac.jp

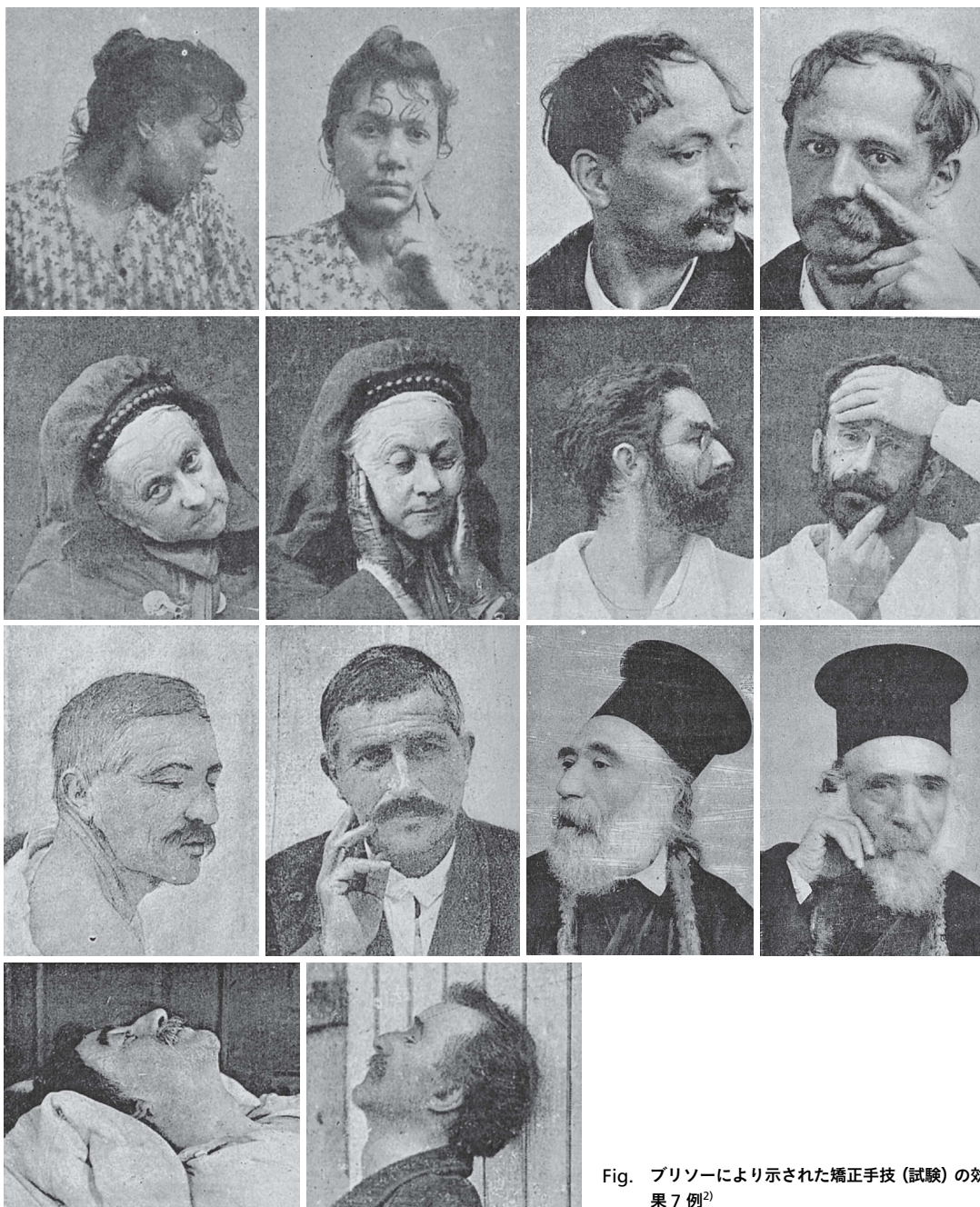


Fig. ブリソーにより示された矯正手技（試験）の効果 7 例²⁾

のせるだけでよい。そうすれば、斜頸は現れず、話ができ、歩け、あらゆる頭部と身体の動きが可能となる。患者は、さらに柄の端を固定す

る必要もなく、単に別の種類の鼻眼鏡が鼻に置かれるだけで、胸鎖乳突筋と僧帽筋の収縮は消失する。

この症例には吃の既往と家族歴があり、これらも精神性の病因として、後に問題点の1つとされます。

文献

- 1) Wartenberg R: Diagnostic tests in neurology-A selection for office use. Year Book Publishers, Chicago, 1953 [佐野圭司 (訳): 神経学的診察法 第9版 (増刷). 医歯薬出版, 東京, 1967, pp154-160]
- 2) Brissaud E: Vingt-quatrième leçon. Tics et spasmes cloniques de la face. Meige H(ed): Leçons sur les maladies nerveuses: la Salpêtrière, 1893-1894. Masson, Paris, 1895, pp502-520
- 3) Noguès E, Sirol J: Un cas de torticollis mental. Nouv Iconog Salpêtrière **12**: 483-488, 1899